

今年で 開湯114年 内牧温泉



よかところ
知っ得情報!
まちの魅力を紹介
するコーナー
阿蘇市



今月は、歴史ある、いで湯のまち、114年「内牧温泉」をご紹介します。



阿蘇五岳の眺めがよい温泉街として、明治、大正、昭和と長年多くの観光客や地元の人たちに親しまれている「内牧温泉」。今年で開湯114年を迎えます。良質の温泉は豊かで、宿や町湯のほとんどが源泉かけ流し。今も20数件の旅館やホテルが立ち並び、黒川の流れとともに安らぎの温泉街の風情を醸し出しています。

九州新幹線の全線開業で、ぜひとも利用していただきたい温泉街ですが、その魅力として、温泉好きの来訪者に「おやつ」と思わせる温泉が「町湯」です。

■地元の人たちとの出会いも旅の思い出

町湯とは、地元の人たちが日ごろ利用する公衆温泉。小さな建物に湯船、けれどもたつぷりの温泉があふれ、つかるとなんとも贅沢。番頭さん無しのところもあるユニークさ、建物のレトロ感、低料金などがうけ、内牧の「町湯」は序々に人気を得ています。

旅の楽しみはその土地の名所やくらしを観ること。町湯は近所の人たちが毎日のように利用する生活の場ですから、そこは

▼田町温泉

古くから地域に親しまれる田町温泉。真ん中に仕切りがあるのが特徴。レトロ感ある町湯の一つです。



ぜひとも立ち寄りたいたいところ。数軒回れば、地元の人たちとの楽しい会話も生まれてくることでしょう。

ただ一つお願いしたいのが町湯は地元の人たちが先祖代々利用してきた愛着のある温泉浴場ですので、入浴の際はマナーを守って利用しましょう。

※町湯は全て駐車場完備。共通看板が目印。

夏目漱石や与謝野晶子夫妻も泊まった内牧温泉

▶山王閣にある漱石氏の銅像。後ろが記念館。写真は「二百十日」百周年記念行事の様子



▶夏目漱石が泊まった部屋
ホテル山王閣



明治32年8月30日、温泉ブームに沸く内牧の新築まもない養神館（現在の山王閣）に、文豪夏目漱石氏が友人とともに宿泊。山王閣では、漱石氏が泊まった部屋をそのまま残し記念館として見学できるようにされています。

漱石氏はこの時の阿蘇滞在の様子を小説「二百十日」に書いています。漱石氏から見た内牧温泉の印象は？ぜひ、「二百十日」を読んでみてください。



▲与謝野晶子夫妻が利用した「杉の間」
旅館「蘇山郷」

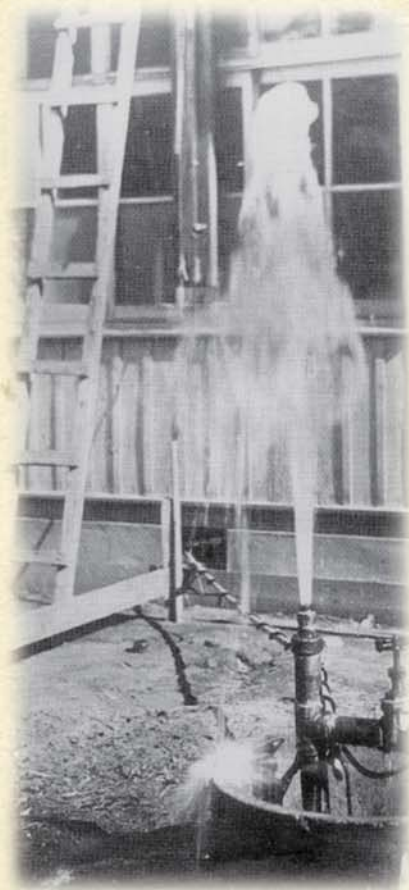
永田巳平氏が、与謝野鉄幹・晶子夫妻を迎えるにあたり、内牧城（現在の阿蘇体育館）の樹齢1000年の神木を手に入れつくられた客間がある。昭和7年、九州日日新聞社の後藤是山氏の案内で、与謝野鉄幹・晶子夫妻、6女の藤子さんが宿泊。客間は昭和7年以来手を加え当時のおもかげを残しています。与謝野夫妻は、この時の阿蘇滞在のうれしさを短歌にしている。



▲左から、6女の藤子氏、晶子氏、鉄幹氏、一番右端が後藤是山氏。



明治30年 内牧に43度の温泉噴出



明治30年、内牧の森七作さんが、内牧竹林地区(内牧5区)にかんがい用の井戸を掘削中に温泉が噴出。38度の豊富な温泉に地域は喜び湧き上り、続いて小里地区で掘削。作業5日目で温泉が噴出し、これが話題となり、当時の九州日日新聞にも「毎日、見物人門前市をなした」と掲載されています。

以後、温泉掘削を目的とした工事が内牧中で行なわれ、40度を超える温泉が次々と噴出。半年余りで50ヶ所も温泉が出ています。内牧は一転して、温泉のまちとなり、宿屋や商店が立ち始め、宿泊客で賑わうまちへと変わっていききました。これが内牧温泉のはじまりです。

翌年には、文豪、夏目漱石も話題の内牧温泉を訪ねており、養神館(現在の山王閣)に宿泊しています。

そもそも阿蘇は火山群で、大昔から温泉が出ていた可能性は大いにあります。

阿蘇谷に、湯浦、湯山、湯ノ口(古城、跡ヶ瀬)、湯の元(車埴)など「湯」のつく地名が残っているのは温泉が出ていたからと考えられますし、宿場町で賑わっていた経緯からも当時、温泉が利用されていたのかもしれない。幕末、内牧で宿をとった坂本龍馬や勝海舟も、阿蘇五岳を眺めながら温泉につかったのかも…と思えば、なんともロマンが広がります。



▲昭和10年頃の阿蘇山上売店



▲昭和7年頃の坊中駅前(阿蘇駅)

参考資料 (亡)井野忠治氏著書

【観光年表】

明治30年

内牧で温泉掘削が行われる。

明治32年

夏目漱石が8月30日、内牧温泉の養神館に宿泊。翌31日、阿蘇登山。(このことが、小説「二百十日」の題材となる)

大正3年

豊肥線熊本～大津開通。大津から内牧までは二重の峠越えの駅馬車路線であった。

大正6年

電灯がつき始める

大正14年

電話がつき始める

昭和3年

豊肥線全線開通により登山客激増。坊中駅(阿蘇駅)が阿蘇登山の玄関口として栄え始める。

昭和6年

自動車用登山道路開通。11月、昭和天皇が阿蘇登山

昭和8年

中岳火口大爆発。年内に4回爆発。内牧にピリヤード場、食堂、理髪店などついたモダンな町営共同温泉ができる。

昭和9年

阿蘇くじゅう国立公園の指定を受ける

昭和19年

大阿蘇登山バスが九州産業交通に吸収合併

温故知新

活火山阿蘇を恵みに、先代たちは「観光」をまちの産業として成長へ導き、その時代時代のニーズをとらえ、斬新なアイデアで遂行してこられました。国立公園化も全国をさきがけ行い、道路整備、鉄道整備においても先輩たちの先見性と情熱がにじんでいます。それらを土台に私たちは、今、情報網や交通網が日々発達する新時代を迎え、世界中へ阿蘇の名を響かせようと取り組んでいます。「故（ふる）きを温（たず）ね、新しきを知る」。先輩たちの積み重ねは、成功したもの、残念ながら失敗したものも全てが、よき参考書です。「まちを知る」うえでも先輩たちのメッセージを考えたいものです。



▲大正10年頃、内牧の民家に湧く温泉。



▲昭和33年4月、阿蘇山ロープウェイ開通式
(九州産業交通提供)



▲昭和36年 内牧にオープンした町営の「ジャングル温泉」。
真冬でも南国ムードが満喫できると人気を博しました。当時、まだめづらしかった温泉プールには、県内外から水泳選手が押しかけ、合宿ブームと話題になりました。

▶火口周辺の「阿蘇ハイライン」を周遊したマウントカー。昭和40年頃の写真。(九州産業交通提供)



- 昭和28年 6月26日、大水害
- 昭和33年 4月、阿蘇山上ロープウェイ開通。
- 6月、阿蘇山大噴火（死傷者33名）施設も大破
- 昭和38年 仙酔峡ロープウェイ運転開始
- 昭和39年 別府〜阿蘇横断道路完成
- 昭和43年 阿蘇山人工スキー場オープン
- 昭和47年 阿蘇熊牧場オープン
- 昭和48年 菊池〜阿蘇スカイライン開通。
- 8月、草千里で第15回全国自然公園大会開催
- 昭和53年 第一相互がピラミッド建設
- 昭和57年 阿蘇火山博物館オープン
- 昭和59年 阿蘇いこいの村オープン
- 昭和60年 昭和天皇を迎えて全国植樹祭開催
- 昭和63年 SLあそボーイが運行開始
- 平成3年 道の駅「波野」、神楽苑オープン
- 平成7年 屋内50m温泉プール「アゼリア21」オープン